

II-2 考察とまとめ

(1) 研究仮説

「問う力」の育成を目的とした各教科の授業後にとったアンケートにおける共通項目を比較することにより、「問う力」育成のためにより有効な授業を同定できるであろう。

(2) 実践

共通のアンケートをとることができた5教科については下記のように実施された。表1. 実施概要

教科	ア 実施日時	イ 実施場所	ウ 参加生徒
国語科	令和3年12月22日 1時間1回※事前課題有り	普通教室	高校1年 40名 D組
数学科	令和3年11月30日 各クラス1時間1回	各普通教室	高校1年 計79名 B組39名 E組40名
保健体育科	令和3年6月～12月末 5時間	普通教室 体育館	高校1年 計40名 E・F組女子各20人
英語科	通 年 A組30時間 F組32時間	各普通教室	高校1年 計80名 A組40名 F組40名
家庭科	令和3年12月～ 各クラス1時間1回 ※事前事後課題有り	家庭科室	高校2年 計235名 A組～F組

エ アンケートのまとめ

各教科で実施されたアンケートをまとめると次の通りである

表2. アンケート集計

1. 自ら考えた回数	0回	1回	2回	3回	4回以上
国語科	15.0%	17.5%	27.5%	20.0%	20.0%
数学科	11.8%	23.7%	32.9%	18.4%	13.2%
保健体育科	3.3%	0.0%	16.7%	10.0%	70.0%
英語科	17.6%	13.5%	16.2%	10.8%	41.9%
家庭科	22.7%	27.6%	16.6%	26.5%	6.6%
2. 促されて考えた回数	0回	1回	2回	3回	4回以上
国語科	5.0%	17.5%	32.5%	30.0%	15.0%
数学科	27.6%	34.2%	22.4%	14.5%	1.3%
保健体育科	0.0%	10.0%	23.3%	23.3%	43.3%
英語科	16.2%	12.2%	12.2%	13.5%	45.9%
家庭科	29.3%	27.1%	16.6%	13.8%	13.2%
3. 考えが浮かんだ回数	0回	1回	2回	3回	4回以上
国語科	10.0%	17.5%	27.5%	30.0%	15.0%
数学科	7.9%	25.0%	26.3%	26.3%	14.5%
保健体育科	0.0%	0.0%	20.0%	30.0%	50.0%
英語科	12.2%	12.2%	14.9%	13.5%	47.3%
家庭科	19.9%	34.8%	13.3%	24.3%	7.7%

	1 考え なくな りそう だ	2 変わ らなさ そうだ	3 少し 考える ように なりそ うだ	4 考え るよう になり そうだ	5 とて も考え るよう になり そうだ
国語科	2.5%	15.0%	52.5%	25.0%	5.0%
数学科	0.0%	15.8%	52.6%	23.7%	7.9%
保健体育科	0.0%	6.7%	50.0%	30.0%	13.3%
英語科	1.4%	9.5%	39.2%	35.1%	14.9%
家庭科	1.7%	11.6%	40.9%	29.8%	16.0%

(3) 評価

ア 参加生徒の反応

アンケート項目「1.自ら考えた回数」「2.促されて考えた回数」「3.考えが浮かんだ回数」をみると、保健体育科・英語科では「4回以上」において40%を超えており、他ではその数値は見られない。また、アンケート項目「4.これまでよりも考えるようになりそうですか。」について、「3少し考えるようになりそうだ」「4考えるようになりそうだ」「5とても考えるようになりそうだ」の割合を合計すると、国語科 82.5% 数学科 84.2% 保健体育科 93.3% 英語科 89.2% 家庭科 86.7%であり、保健体育科・英語科が比較的数値が大きい。これらのことから、保健体育科と英語科（以下 保英科）の授業と他の教科の授業（以下 国数家科）を比較することで、「問う力」育成のためにより有効な授業を探る。

まず、「ア 実施日時」をみると、保英科は複数時間で指導し、保健体育科では5時間、英語科は通年で指導しA組32時間、F組30時間指導後にアンケートを実施した。一方、国数家科の指導時間はそれぞれ1時間であり、その指導時間数において大きな違いがある。このことから、指導時間が多いほど「問う力」が育成されたと考えることができる。その理由として英語の指導者から次のコメントがあった。

テスト後の話し合いや、個人的な振り返りで、「このことはあいつがあの時言っていたことか」といった「気づき」があるのではないだろうか。

また、保健体育科の教師からは次のコメントがあった。

生徒同士の意見交換の時間を取りました。

これらのことから、直接的な指導時間に加えて、生徒同士の話し合い等が生徒の気づきを促し、それが考える回数の増加に良い影響を与えたと考えられる。

次に、「イ 実施場所」を見ると、家庭科を除くすべての教科で普通教室を利用している。また、保健体育科で体育館を利用している。このことから、実施場所による影響は考えにくい。

また、「ウ 参加生徒」をみると、家庭科は2年生、それ以外は1年生であることから、学年による影響は考えにくい。一方、保英科ではともにF組女子が指導されている。このことからF組の女子生徒が特に「問う力」について考えた回数が多いのではないか、という仮説を持つことができる。そこで、F組女子（18名）の英語に限って調べると、「1.自ら考えた回数」9名（50%）、「2.促されて考えた回数」9名（50%）、「3.考えが浮かんだ回数」8名（44%）であり、表2の英語科の数値（41.9%、45.9%、47.3%）と比較し、大きくは変わらない。したがってF組女子が大きな影響を与えたとは考えられない。

以上のことから、本研究仮説をもって実施した授業時間が複数回あると、単発の授業よりも生徒が「考える」回数が多い結果となった。その原因として、話し合い等によって「気づき」を共有する時間が生徒の「問う力」育成の機会増加に良い影響を与えているとの仮説を持つことができる。

イ 成果と今後の課題

〔成果〕本考察により、単発的な授業よりも複数回の授業が生徒たちの「問う力」育成になること、さらにその原因を仮説としてもつことができた。

〔課題〕「時間数が多い」ことが「問う力」をより育成することにつながるのであれば、同一クラスでアンケートを複数回とすることで、その増加傾向が見て取れることが期待できる。また、単発的な授業であっても生徒に「気づき」の機会を与えることが「問う力」育成につながることも期待できる。それらを検証したい。一方で、各授業には「問う力」のみでなく教科・科目特有の目的もあり、それら2つの目的の重みづけにより「問う力」育成の程度は異なると思われる。そのような事情のもとでどのような授業が「問う力」の育成により役立つのか探ることも今後の課題である。